会員の広場
Member's Open Space

古川柳に見る江戸のおしゃべり
嫁と姑

●美唄歯科医師会会員
雨田　実

古来から嫁と姑は仲が悪いものと相場は決っている。江戸時代においてもその域は出ない。嫁と姑を描いた古川柳を通して，その確執を眺めることによって，双方がどんな言葉のやりとりをし，どんないびり方をしているか，その確認によって現代との共通点をさぐるのもおもしろい。万古不変なものは女の業でもあろうか。

「客に来たようだ。と嫁をもう叱り」(安七)

安永7年1776年作。

婚家に来てその家の習慣や調度品の場所など，やっと覚え始めた嫁。姑の思惑の通りに家事を処理したいが，うろうろすることが多い。姑の目は絶えず嫁の一挙一動を観察している。嫁の所作のうとさに何回か遭遇すると，姑はどうしても発言したくなる。「お前はこの家の者になったんだよ。なんでもたもたしているんだい。まるで客に来たようだ」と叱責したのである「もう叱り」の「もう」というのは，嫁に来て早々，まだ日数もたっていないのにという意で，男ならばそんなに拘泥しないのに姑はすぐに口を出すものである。女が女を見る目は，常にそのアラを探すという天性を秘めている。

「ささもあがられますげな。と姑言い」(寛元)

寛政元年作。女性語で酒を「ささ」というとある(俚言集覧)。少し上品に言う時に用いるとある。女は控えめにしていればよいという時代であるから，嫁が酒を呑めるというのは商売女のようで，姑の気にいるはずがない。「あがる」は呑むの敬語，「げな」は接尾語の「げ」に助動詞の「な」がついたもので，伝聞・推定を表す。近所の婆連の集まりで「うちの嫁は，あばずれのように，酒も召し上がるのさ」とその欠陥を吹聴している場面である。敬語を使ってあがめている分だけ，さげすむ心情が濃厚なのである。

「嫁が来て，わしを談義へいびり出し」(安五)

姑の楽しみの一つは，寺参りを兼ねて僧侶のお談義を聞くことである。仏教の教義をおもしろおかしく話すのが談義僧である。寺で行われ後生願いの老女が押しかける。「楽しみは嫁をいびると寺参り」の句もあるほどで，老女同士寺に出かけて世間話と嫁の至らなさなどの雑談を交わす。姑は毎日のように嫁をいびっておきながら「うちにも嫁が来ましての，こうしてわしをいびり出すのさ」と己の辛さを訴える。「いびり出す」とは，いじめて，いたたまれないようにして，追い出す，の意味である。自分は誠心誠意に正当であり，いつも冷たい目で見ている嫁が不当であることを強調して，それで自己満足を覚える老女特有の思惑であろうか。

「生れても抱きはしよない，と姑婆」(明五)

明暦5年作。孫の生誕が近づく，息子夫婦は赤子の肌着その他をそろえて忙しい。そんな様子を見ながら，嫁に向かって，抱きはしないという。抱きはしないではなく，抱きはしよない，と言葉が訛っているところは，憎々しげに告げている調子を強めている。しかし孫が生まれると可愛がるのが人情で，「孫をあやしあやし嫁を睨みつけ」「憎い嫁可愛ゆい孫をやたら産み」などと，嫁は憎たらしいが孫は可愛いとの句多し。ここまでは姑側からのいびりかたや，意地悪な言葉について述べたが，今度は嫁の側から取り上げて述べて見ることにしたい。

「里へ来て，ほんに，わたしは因果者」(明五)

明暦5年作。嫁は実家に帰ると自分の境遇を涙ながらに実母に訴える。これが嫁にとっての一つの救いの道でもある。古川柳の世界では嫁の姑は鬼婆のように意気地が悪く，里の母（実家の母親）は慈愛に満ちあふれ，陰ながら姑と対決する嫁の味方として，対照的に描かれているのが常である。ほんにわたしは因果の巡り合わせが悪く最高の不幸者だ，と実母に告げてこぼすのである。「声色で我を叱って里で泣き」，娘が姑の口真似までして，その非道な文句を再現する。実母は「さあ，そこを堪忍してと里の母」「そうであろう，そうであろうと里の母」「里がえり何やら母は聞きのこし」の句もある。「憎そうに盛りやったのふと姑言い」，嫁と姑の確執もついに姑の老衰と死という終焉を迎える。床にいる姑，薬を毎日飲んでいるのに快方の気味がない。これは嫁の仕業かと逆恨みをする。煎じ薬を持って来た嫁に憎々しげな視線を送り，「盛りやったのふ」と言葉をかける。盛りやったとは煎薬の中に毒物を入れたという意である。当時岩見銀山と称したねずみ取りの行商が，いたずら者は居ないか，岩見銀山ねずみ取りの呼声で行商をしたという。

「姑が死ぬと騒いで叱られる」(安六)

安永6年作。姑の病床のそばにいて終日看病をしている嫁が姑の病の急変に気づいて，さあ大変と「お姑さんがあ死ぬ，お養母さんが死ぬ」と絶叫して，人々を呼ぶ。真実に大変さを訴えているのであるが，あまり騒ぎすぎるな，と夫などから叱られたのである。いびられ続けた嫁の状況を見聞している者たちから，嫁が騒ぎすぎるとかえって，嫁が姑の死を歓迎しているように思われるからである。

「姑の遺言，去ってしまへなり」死の間際まで姑のひねくれた心情は不変である。その遺言でさえも，あんな嫁去ってしまえ，なのである。決戦の最終段階でも，まだ張り合う気持ちは頑に持っているところが，いびり魂ということであろうか。「あわ良くば嫁の死水とる気なり」の句もある。「仕合は嫁だ，と石屋朱を潰す」，夫に先立たれた女は再婚せずに菩提を弔う証として，墓に自分の名前を彫り，朱に染める。通称赤い信女である。姑が逝去したため銘の朱を削ることになる。この姑が嫁を猛烈にいびっていた噂を聞いていたので，これで嫁さんも救われると思い，仕合わせは嫁さんだよと，石屋は細工をしながら，この作業を見ている人々に聞こえるようにつぶやくのである。嫁が姑になるの言葉の通り，その姑が嫁に対しては世にも恐ろしい姑婆になり，嫁に出した娘の里帰りの時には，慈愛に満ちあふれた里の母に変身して，涙を流しては「さうであらう，さうであらう」の里の母になる。娘を婚家にかえした途端に世にも恐ろしい鬼の姑になる。人間（女）の業というしかないものであろうか？